

井上光晴

流浪

井上光晴
流浪

福武書店



井上光晴（いのうえ・みつはる）
一九二六年、旅順に生まれる。電
波技術養成所卒業。戦後文学を継
承する第一人者として、日本の底
辺の存在・戦争など体制の矛盾を
えぐる作品を発表。「象を撃つ」「死
者の時」「地の群れ」「明日」「暗い
人」「井上光晴長篇小説全集全15
巻」など著書多数。

流 浪

一九八九年七月一〇日 第一刷印刷
一九八九年七月一五日 第一刷発行

著者 井上光晴

発行者 株式会社 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八

〒101 電話 (03) 23301233

振替口座 (東京) 六一〇五〇九七

印刷 大日本印刷

製本 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示しております）

流
浪
目
次

流
浪

7

天草四郎の腕輪

117

さかえ食堂始末

141

キャビアキャンプの自画像

163

装丁
菊地信義

流
浪

流
浪

留置場の朝食に熱い味噌汁がでるのは、二度目の経験であった。もう十年も前、佐賀県古湯温泉の警察署で、偶然そういう出来事にでくわしたことがある。どんな仕掛けなのか、差入れ屋の弁当に付けられた玉子の味噌汁に湯気が立っていたのだ。今、彼の手にする碗は明らかに駐在所警官宅の台所から運ばれてきたものだ。つまり女房手製の朝飯定食というわけだろう。

汁の具にしては多すぎるほどの南瓜に箸をつけながら、住居を兼ねた駐在所に連行された直後、垣間見た巡査の女房の哀れみたつぶりのまなざしを、開府廉吉は思い起こした。先程、盆膳を運んできた長身の少年は息子でもあろうか。「中学生」ときく彼に愛想よく肩をすくめてみせた。

昨日の夕暮から彼の一晚過ごした、三畳ばかりの狭苦しい板敷きの留置場は、元々普通の物置か何かであつたらしく、細長い硝子戸を背伸びして開けると、木製格子の向うに、黒ずんだ岩礁を噛む白っぽい海がひろがつていた。すれすれの波間を乱舞するヨナキの群れ。

九州西域の五島列島。その北端に転在する島々をねぐらとするずんぐりした海鳥はヨナキと呼ばれていたが、格別夜啼きするわけでもないのだ。彼がいぶかつてわけをきくと、黄島の海辺で雑貨店を商う老女は、にたりとしながら「よそ者にはわからんとよ」といった。

黄島の朽ちた船小屋でくらすようになって百日余、よそ者の理解を越えた出来事にたびたび遭遇したが、雲丹の瓶詰加工場の仕事にありついて、ようやく折合いのついた生活を始めようとした矢先、取り返しのつかぬというか、彼にとつて後戻りのきかぬ事件が発生したのである。

グレイのジャンパーを着た昨日の印象とはまるつきりかけ離れた初老の駐在巡查が、ドアを開けて入ってくると、食事を終えた彼の髭面に、嘗めるような視線を走らせた。

とすると、さっきの少年とはどんな間柄になるのか。

「昼の船で小値賀にでる。それから有川に行く。よかな。……」

「そうですか」

「有川署で、あんたまさかべらべら喋るつもりじゃなかるうね」

「何を」

「本籍とか、何処で何をしとったとか、そがんこと。有川で喋ったりされると、こっちの面目はまるつぶれになつてしまうもんな」

「記憶にないのを、話したりできませんよ」

「せいなら、よかばつてんね。……」

巡査の目にちらと安堵の影がやどつた。手乗平馬という名前の、角張つた顎を反らせた男で、女房とはかなりの年齢差に見える。

「戦争中、衛生兵だつたちゅう噂のとるが、ほんなことね」

「何もおぼえていません。何処をどう歩いたか、それも曖昧なまま黄島にきたんだから、戦争中も何も、頭の中はからっぽ。……」

「まあ、そうやろな。本籍まで忘れとる人間が、戦争中のことだけ頭にしみついとるはずもなかない。……しかしまあ、衛生兵でもなければできん手術をやり遂げたんやから、普通の話でいくと美談になるとばつてんね。現に長崎新聞の北五島版にもそうでとつたし、あんたを引っ張つてこにゃいけんなど、想像もしとらんかつたとよ。……」

彼は黙っていた。途端に、手乗巡査は言い募るような声を發した。

「死ぬか生きるかぎりぎりの逆子を、腹の中からとにかく見事に救いだしたとだから、普通のいい方で喋るなら、それこそ美談以上の美談になるとたい。あんたがもし、有川か奈良尾の医者なら、今頃は香崎教会の金々江神父のごとなつとるかもしれんとよ。……」

開府廉吉は違うことを考えていた。身柄を有川警察署に移されたとして、草色のバッグに押し込んだ下着類の着替えで間に合うかどうか。不安な気持がふつと湧いたのだ。

手乗巡査の角張った声はつづく。

「これは先にいうとかんといかんやつたとはってん、昨日の晩から差入れのいっぱいあつとよ。カップラーメンに芥子蓮根、軍手と味の素なんかも入つとるごたつたな」

「こちらで適当に処理して下さい」

彼がそういうと、手乗巡査は片方の掌で口許を被うような仕種をしながら立ち上がった。

「医事法とかいう法律の絡まつとるらしけん。美談が美談にならんとたい。衛生兵やったことでもわかれば、情状酌量になるかもしれんと、誰かいいよつたばってんね。……」

出て行つた巡査と入れ替りに、目のくりくりした小太りの女房がやつてきた。いつぞや雜貨店で顔をあわせて、何処からきたのかとか、そういう類いのやりとりをしたことがある。

「カップラーメン、食べたかとなら作つてもよかとよ」

「いや、もう腹いっぱいだから。味噌汁、とてもおいしかった」

「決着のつくまで此処におんなさると思うとったもんやから。……」

丸顔の女房は眉をひそめた。

「有川まで行くとに、その身形じゃ寒かと思ひなかつたか」

「慣れてるから」彼はジャンパーの袖口を引張った。古い革製のもので、袖口の毛編みを補修して肘も半ば擦り切れている。

「どうしてこげんことになったのかわからんと、みんな首をかしげとるとよね。有川からいきなり命令のきて、父ちゃんも困り果てとるとよ。……ご免なさいね。……」

密告者のことを女房はいつているのだ。難産で死に瀕する女を手術して、親子ともども救出するという快挙を、黄島の誰かが有川警察署に差したのだ。そんな話を伝え聞いた他島の者の仕事と考えられなくもないが、単なる風聞のみで警察が動くわけもなかった。

「ひとつお願いがあるんですが」

「よかとよ、何でも」

「洗濯した下着が船小屋の中に干してあるんです。着替えが足りないかもしれんです、それを持ってきてくれませんか」

顔いた女房が一旦閉じたドアを少しひらいて、声を吹き入れた。

「船のでるまで大分間があるけん、横になつたらどうですか。眠りとうなつたら眠りなさい。父ちゃんもいうとつたけんね。昨日の毛布を使われるとよか。……」

風もないのに、波しぶきのようやく荒だつ岸壁に立つて、降旗行雄は棧橋に近づく小型連絡船の太古丸を見ていた。瘦せつぽちの小柄な中学一年生で、この地方でバインとかバイナッブルと呼ぶやどかりを五十匹も詰込んだビニール袋を片手にぶら下げている。普通のやどかりと較べて倍ほども図体が大きく、どぎつい黄色の手足をまるめると、なんとなくバイナッブルの罐詰に似ているところから、その名前はきていた。ひと昔前までは無数に生息していて、黄島の由来をそこに求める者さえいたくらいであったが、ある年を境にぼったり姿を消し、去年の夏あたりからぼつぽつと、戻ってくるようになったのだ。

太古丸のロープが繫柱に巻きついたので、彼は船着場へ下りた。普段と違う気配の乗客が棧橋のあちこちに佇み、やどかりを渡すべき男は、いちばん後からゆつくりと舷側の出入り口をまたいだ。